

沖縄県立博物館創立30周年記念講演

特殊動物からみた沖縄の自然

池原貞雄

沖縄県内にいる動物を他府県のそれらと比較してみると、分布の仕方あるいは種類、あるいは環境の中での生活の仕方がたいへん特徴的であるように思われます。ある動物がそこにいるということ、それは偶然そこにいるということではなく、そこにいるべくしている、といいましょうか、その生活している環境と非常に密接な関係を持っているのです。そして、そこにその動物がいるということは、ただ、現在、その環境と関係を持っているというだけではなしに、歴史的に長い過去の自然環境、その中を貫いてきたものであります。言いかえますと、そこにある動物がいるということは、遠い昔から今日にいたるそこの自然環境によってつくり出されてそこに存在しているとみるとみることができるのです。

そのようにして、動物というものが環境と切り離せない関わりを持って生存しているということでありますから、したがって、ある特定の地方に住んでいる動物の種類とか分布の仕方、生活の仕方を通して、その地方の自然環境がどのような特性を持っているのか、おおよそうかがい知ることができます。

ここでは、沖縄にいる動物で他の地域に見られないもの——これはたくさんおりますが——、そのうちからとくに法律によって天然記念物に指定されている特殊動物を通して沖縄の自然の特徴を考えてみたいと思います。

御承知の通り、天然記念物とはひとつの国だとか、地方に昔から存在し、または現在も生存、生長していて、長くその国土の記念となる珍しく貴重な生物または地質、鉱物であります、これを採取したり、破壊することが法律で禁じられているもの、とだいたい定義づけされています。要するにその地方の国土を記念する記念物ということでありまして、学術的に見ましてもたいへん貴重なものであります。

ただし、特殊動物だけが貴重なのかといいますと、けっしてそういう訳ではありません。そのような特殊動物が今日、そして将来において生きていけるのは、それをとりまくところのいろいろの

要素、場合によっては、その動物が食用としている動物たち、あるいはその食用とされる動物たちが食べている落葉だとか木だとか、その他の多くのものによって支えられているからであります。「一将功成って万骨枯る」といいます、天然記念物として法によって保護されて生きていけるというのも、それをとりまいている多くの動物、植物、地質、気象的な条件などいろいろなものが、そのように相互に関係し合っているためであります。学問的にある特定の動物が非常に貴重であるということは、簡単に判断するのは困難であります。ただ、そういう特殊動物は一般によく知られていますし、身近にいるということもありまして——時間の関係もありますが——今日はそれをとりあげたわけです。

さて、昭和49年に文化庁から出された「史跡名勝・天然記念物・重要民俗資料扁」の中から全国の天然記念物を調べて表にし、重要な動物だけに関して他府県と沖縄県を比較してみました。昭和49年1月現在（ただし、沖縄県の場合はその後4件増えたので昭和50年6月現在）の表を見てみると、その数が一番多いのは東京都の22件、次が北海道の19件です。そしてその次が沖縄県の18件、山口県の16件と続きます。10件を越えるのはそれに続いて高知県、鹿児島県、これらでベスト7ということになります。北海道が19件と数が多いのは、日本国土のなかで一番北にあるということと、全国で一番面積が広いということとよく理解できるのですが、東京都の22件というのは説明を要します。実は、これは中味をよく調べてみると、東京都に古来いたというものはほとんどありません。たいてい日本に古来飼育されていた鶏だとか、そういうものを大事に保護している。いわゆる畜養動物、そういうのが5件ぐらいあります。その他の17件は伊豆・小笠原地方にあるわけです。それを見ると貝から、昆虫から、鳥からいろいろなものが入っております、オカヤドカリ——これは沖縄の陸上にもいるヤドカリですが——にいたるまで全部天然記念物として保護されているのです。そしてまた陸にいる貝、陸産貝も加えております。そういうことで全部を合わせて22件ということになるわけです。

沖縄県は全国の中で第3位ということになっておりますけれども、現在すでに法によって指定を受けただけで18件であり、その18件を大きく分けてみると哺乳動物が6件、それから鳥類が9件、爬虫類が3件、ということになっていますので、他の地域のようにカエルだとかイモリの類の両棲類あるいは軟体動物と呼ばれている貝の類のようなものまで、これから申請したり、調査をして指定していくとなるとその数は来年、さ来年あたりは北海道、東京を追い越して全国のトップに行くのではないかと予想されます。昭和51年に文化庁から都道府県の天然記念物として保護されるべきものをあげた報告を見ますと、沖縄県の場合、動物の分野でも、植物の分野でも非常に多い。そういうところからみても、数年をまたずして、沖縄県の天然記念物指定の動物が全国でトップに躍り出る可能性は十分考えられるわけです。

それでは、沖縄県で天然記念物に指定されている動物を次にあげてみましょう。

仲ノ神島海鳥繁殖地、これは西表島の西の方にある無人島ですが、そこにはカツオドリだとかアジサシ、あるいはミズナギドリというような海鳥の類が、シーズンになると島を埋めんばかりにたくさん飛んできて、繁殖しているのです。そこが国の天然記念物としてまず指定されているところです。

それから、アホウドリはむかしは尖閣列島の黄尾嶼だとか南小島あるいは魚釣島、そういうとこ

ろにたくさんいたのですが、水鳥ですから羽毛がたいへん柔かい、それで羽ぶとんの材料として非常に貴重な材料であるということになりました、その羽を外国に輸出することで企業が成り立つぐらいにたいへんな乱獲がされたのです。それでアホウドリは絶滅に近くなりました。1971年に琉球大学の学術調査団が、そこで12羽のアホウドリの生存を確認しました。日本全体では東京都に属する鳥島と、尖閣列島の南小島、そこの方だけで知られている鳥です。

それからもうひとつ、新聞などでもよく知られているアカヒゲがおります。これは種子島、奄美大島、徳之島、沖縄、石垣、西表にあります。沖縄にいるアカヒゲの類はホントウアカヒゲと呼ばれ、先島の石垣、西表にいるアカヒゲはウスアカヒゲと呼ばれて区別されています。このアカヒゲはたいへんかわいい鳥で、スズメぐらいの大きさをしています。頭から首、尾にいたるまで、からだの背面は赤味を帯びた橙色をしています。オスは喉元から胸にかけて黒っぽくなっています。国頭の山道をテクテク歩いていると、道に出て、人が進んでいく前をピヨンピヨン、案内するかのように先行します。たいてい谷川の藪の付近に非常に多く、すばらしくいい声で鳴きます。おそらく沖縄の野鳥のなかではトップシンガーでしょう。

カラスバトというのがいます。個体数が多く、国頭や慶良間列島、とくにケラマジカのいる屋嘉比島にはたいへん多くて、そこでは手の届くところまで接近しても、人おじせずなかなか飛び立ちません。

リュウキュウキンバトという鳥も天然記念物に指定されております。これは沖縄県下では石垣島と西表島、それから小浜島、与那国島などにあります。沖縄の野生のハトの中では一番小型です。くちばしが紅色をしていて、頭の方が白っぽく、足も紅色です。かなり南の方までいる鳥でして、国外では台湾にもおりまし、中国南部、タイ、マレー、ビルマ、フィリッピンと分布はかなり広いのですが、沖縄のものは台湾のものともっとも縁が近いとされています。

それから、ジュゴンはよく御承知のザンの魚、海洋博に持って来られて不幸にも死亡したことがあります。これも沖縄近海から南の暖かいところにしかいない動物です。

その他にカンムリウミスズメというものがおります。これは沖縄だけにいるという訳ではありません。伊豆七島の方で繁殖して、だいたい日本列島の海岸とか島、そこを渡って分布している。そして冬になると、フィリッピンまで渡っていくといわれております。これがシーズンになると沖縄の方に渡ってくるのです。

それからイジマムシクイというのがいます。これはウグイスの仲間ですが、色はすすぐた色でたいして美しくはないのですが、これが同じように伊豆で繁殖します。森林に深く入るということはしないで、沖縄を訪れて、それからフィリッピンの方へ渡っていきます。

宮古、八重山地方にキシノウエトカゲという大型のトカゲがあります。大きいもので35cmぐらいになり、日本に産するトカゲの仲間では一番大きいものです。

ケラマジカは慶良間列島の屋嘉比島にあります。屋嘉比島は戦争直前まで銅を採掘していたため、銅坑が残っています。その銅坑の崩れたところに、繁殖時期になりますと姿を見せます。これは最初1625年に、薩摩から持って来て、慶良間の古場島に入れたといいますが、現存するケラマジカがその子孫なのかあるいはそれ以前からいたものなのか、その辺のところはよくわからず、現在調査が進められています。

日本に住んでいる野ネズミのなかで一番大きいといわれているのがケナガネズミです。その名のとおり、背中に長い毛があって、長さはだいたい6cmぐらいあります。大きさは中型のウサギぐらいです。特徴的なのはシッポの半分がまっ白になっていることです。地上に降り立って地上で生活するということはわりかし少なくて、巣も樹洞の中にあり、樹上生活を多くする動物です。

トゲネズミといわれている動物があります。ジャコウネズミ、これは方言でビーチャーと呼ばれていますが、これとだいたい同じ大きさです。からだに、とくに背中の付近に針のような毛を持っています。その毛は針のように丸いものではなく、ソテツの葉のようにひらべったくて固いトゲを普通の毛の間にまじえています。

イリオモテヤマネコ、これは、普通のネコとどこが違うかというと、耳が短かくて丸くなっているところです。それから眼と眼の間隔と鼻鏡の幅が同じくらいに鼻が大きくて、その面相は非常に獰猛に見えます。この山猫を見なれてからふつうの家猫を見ますと、顔が三角になっていてかわいらしく見えます。からだにある模様は、ふつうのトラネコだと雑種のネコはだいたい足とか胴体、尾などに横に縞状の紋様が見えるのですが、このイリオモテヤマネコの場合は、虎のように点々と縞模様のものが見えるところが違います。

普通の猫の眼の瞳孔は大きくなったり小さくなったり、非常にシャープに針のように細くなったり、丸くなったりして、レンズにあたるところが非常にはっきりしています。ところがイリオモテヤマネコの瞳孔はボヤッとぼやけておりまして、どうも黒い瞳というものがはっきりしないのです。森林の中に生活しているために、ややもすると光が不足する、だから物の形をシャープにとらえるというよりも、動物の動きをとらえるための眼になったのではないかと思われます。尾はからだの3分の1ぐらいしかなく非常に短い。家猫が喧嘩をするとき尾をふくらませますが、この猫は眠っているときでも、尾はいつでもふくらんだ状態になっています。また、からだが非常に長く、胴長になっています。これはジャンプしやすいようになっています。

イリオモテヤマネコは近々10年以内、1967年にはじめて学界に「イリオモテヤマネコ」として紹介されたものです。名もなく誰に知られることもなしに、西表島の森林の中でひっそりと暮していたのに、1967年にはじめて和名をイリオモテヤマネコ、学名を「マヤイルールス・イリオモテンシス」というハイカラな名前をつけられて、時代の寵児として学界の檜舞台にあがり、脚光を浴びるようになりました。人に知られず、名前もつけられないで、原生林の中でひっそりと暮していた方がイリオモテヤマネコにとって幸せであったか、世の人たちにいろいろともてはやされて名をとどろかせている今の方が幸せなのか、そのところはにわかに結論は出せないと思います。

セマルハコガメは西表島と石垣島に生息する亀で、背中が丸くなっています。普通の亀は腹甲板、甲羅の腹側の方がたった1枚の板状になっていますが、この亀の場合は、まん中から2つに割れるようになっていて、ちょうどつかいのようになっています。そして危険が迫ると、頭や手足を中心にひっ込めるだけでなく、その腹甲板を前半分は前へ、後半分は後の方へピシャッとからだを隠してしまうことができます。卵は白っぽくて橢円形をしています。長さが4cm、幅は2.5cm、重さは7.5g～8.0gぐらいです。大きいものになると12～13個の卵を生みます。

カンムリワシは頭の方が白っぽくて、しかも頭の羽毛が冠をかぶったように頭の後に房状に出ています。これは台湾に類縁のものが見られます。沖縄では西表島と石垣島にしか住んでおりません。

ダイトウオオコウモリ、これは普通沖縄にいるオリイオオコウモリあるいはヤエヤマオオコウモリと違って、からだの毛が非常に黄色っぽくて黄金色になっています。オリイオオコウモリやヤエヤマオオコウモリは、白いマフラーでも巻いたように、首が輪状に白くなっていますが、ダイトウオオコウモリはからだのはほとんど全面にわたって黄金色になっています。

リュウキュウヤマガメ、これは方言でヤンバルガーミといわれていますが、この亀の色は青味がかっております。メスは甲櫂の周辺、表面はそんなにデコボコになっていませんし、色も橙色が加わったものになります。沖縄本島では北部、久米島、渡嘉敷島にしかいません。奄美大島でも見つかっていません。

ノグチゲラは、非常に古くなった木の幹を約20～25cm奥に掘り込み、それから下の方に45～50cmぐらい掘り下げて巣とし、その底の方に卵を生むのです。頭の方が赤味がかった錆色になっていて、これはオスの特徴になっています。メスには見られません。大きさはヒヨドリより少し大きいぐらいです。

宮古の伊良部島、下地島、あるいは来間島、宮古の与那覇海岸には、毎年ものすごい数のサシバが渡って来ます。そんなときには宮古ではこれを簡単に生け捕ることができます。今ほど数が少なくなかった頃には、イモヅルを頭にかぶって畠に待機していると、その上にサシバが止まる。それを手でつかまえることができるほどたくさんいたといいます。サシバのような中型のワシタカ類が手づかみでたやすくとらえられるところは、寡聞にして他に例を知りません。

それから、サンゴ礁は大部分は造礁サンゴの虫の群落が集まったものです、奄美大島以南でなければこれほど大規模なものは見ることができません。

サンゴが群をつくって生活できるためには、海の環境がそれにふさわしいものでなければなりません。海水の平均温度が18°C以上あれば、ある種のサンゴはなんとか生きられますが、沖縄の海水の温度は20°C以上です。それにサンゴが生活できるためには海が澄んでいなければなりません。サンゴは、その中に住んでいる単細胞の藻類が光合成でつくる養分の恩恵を受けていますが、海水がにごると日光が入らなくなるためその恩恵を受けることができなくなります。それから塩分濃度も高くなればなりません。だから大きな川が流れ込むような河口では、サンゴは発達しない。沖合にリーフが発達していても、洪水などで真水が流れ込むようなところにはあまりサンゴは発達しません。サンゴが発達するためには砂とか泥とかの底質であってはならないのです。沖縄の近海はこうして、他府県の近海とは自然の環境条件がたいへんちがっているわけです。

今までにあげたのは沖縄にいる哺乳類と脊椎動物、爬虫類などのごく一部で、今までに天然記念物に指定されたものだけです。

特殊動物のほとんど全部といつていいくらい、中国、台湾、フィリピンあるいはマレー半島、そういうところに類縁の動物が分布しています。そのことから、沖縄という地域は熱帯的な要素が相当含まれている、ということになります。このことは、北方、南方の動物、植物の種類をいろいろな部類について比較してみてもいえることです。沖縄には、しかし、暖帶あるいは温帶の動植物も一緒に分布していますから、沖縄には熱帯的な要素、暖帶的・温帶的要素が一緒に入り込んでいます。そのため、その中では熱帯的な気候に適している動物、あるいは暖帶的・温帶的な気候にいる動物と一緒に生活できるわけです。沖縄の山野を歩いていると、いながらにして熱

帶的なものと暖帶、温帶でなければ見られないものを同時に見ることができて都合がいいということになります。ですからわたしは、沖縄の島々は天然の自然動物園であり、自然植物園であると見ていいのではないか、と考えております。

それから、いろいろな特殊動物の分布を見ますと奄美大島と沖縄本島だけ、あるいは沖縄本島だけ、あるいは慶良間だけ、あるいは石垣島と西表島だけに、あるいはまた大東島だけに分布している、といった事例が出てきます。これは特殊動物に限らず、他のいろいろな動物の分布を調べてもいえることとして、ある動物がこの島にいてあの島にはいない。そういう例が非常に多い。沖縄にあるたくさんの島々は、生物学的には宮古だとか八重山というようにひとまとめにして把えることはできなくて、島それぞれが自然的特性をそなえている、島ごとに自然環境が異っている、という特徴があるように思われます。

たとえば、ひとつの島が全部草原であるとしますと、そこにいる動物の種類はたいへん単調なものになっています。沖縄の島々には哺乳動物から鳥類、爬虫類、両棲類、それ以下のものに至るまで、島は小さいながらもそれぞれいろんなものがそこで生活しているのです。ということはけっきょく、沖縄の島というのは小さいながらもいろいろな動物が生活できる複雑な自然環境をもっているといえるでしょう。そして、島々の動物の分布を見ますと、島の成因には相当違いがあるのではないかと考えるわけです。たとえばある動物がある島に限って生息している、イリオモテヤマネコは西表島にしかいないのですが、イリオモテヤマネコが海を泳いで渡ることはほとんど考えられません。あるいは、沖縄北部にいるトゲネズミ、ケナガネズミ、リュウキュウヤマガメ、そういうものも海を泳いで近くの島に渡るということはほとんど不可能でしょうから、これらの動物がその島に住んでいるということは、その島が大昔からどのような変化をくり返しながら今日の状態になったのか、それを考える手がかりを支えてくれるかもしれません。あるいは沖縄本島などは中国大陆と陸続きであったかもしれません。島によってそれぞれ出来方、島の歴史がみんな違っているものと思われます。

さらに、サンゴ礁が沖縄のどの島にも発達しているということは、沖縄の海が非常にすぐれたといいますか、特殊な条件をそなえたところであるということもわかります。そういうふうに、いろいろな珍しい動物が無人島にも、あるいは人の住んでいる島にもたくさん住んでいるものですから関係者から見るとひとつひとつ動物、ひとつひとつ雜草がどれも貴重なものに見えて仕方がない、という人も出てくるわけです。

ところが、現地を調べてみると、人間のいろいろな大規模の活動によりまして、そのような貴重な動物が生活している環境というものが、破壊されたり、変質してきているのです。それにつれて、その中で生活している非常に珍しく貴重な動物が年々数が少なくなっていくのがわかったのです。

そのような特殊動物に限らず、大昔から受け継がれてきた自然というものはいろいろ重要な価値を持っているわけでして、昔は自然保护だと天然記念物の指定というものは郷土を記念するものとして、郷土の誇りとして、さらには愛郷心と結びついてなされてきたわけですが、それが学術研究の情報源としても重要な意味を持ってきました。なぜある動物がある決まった場所にしか分布していないのか、学問上まだ解決されていない点もあります。それに、教育上の教材としての価値も

高まって来つつあります。

それに、わたしたちの生活する空気、水、土壤等の環境が非常に悪化しつつある。わたしたちはそういうものになかなか気づきませんが、環境悪化の状態はいちはやく生物の上に現れてくる。ですから、いい環境か悪い環境か、堪えうる環境か、そうでないのか。そういうことを判断する場合、周囲の動植物はひとつの目安となります。これは何も特殊動物に限っていえるわけではありません。

さらには周囲がアスファルトやコンクリートで舗装されると、物質生活では不自由な面が少なくなるとしても、心の安らぎを覚えることができなくなってくる。次第に人工的なものに埋め尽くされると、何か飽き足りない、よそに憩いの場を求めてくなる。そういう意味からしても、わたしたちのまわりに珍しい特殊動物がいるということで、非常に救われた心境になり、心の緊張もほぐれてくれます。

そのような特殊動物が生活できる環境はわりかし複雑で安定したものでありますから、世の中の目まぐるしい変化の中あって、それに心まで流されないようにするためにも不動のものが必要であります。そういう場合に動かない、変わらない自然があるということは必要なことです。

このように、沖縄の自然は、動物の分野からみてもきわめて貴重なものであります。しかも国土のどの地域にもみられない特性をそなえています。わたくしたちは、この特徴ある郷土の自然を先祖から受け継いできましたが、これを大事にまもって子孫に引き継ぐ責任があります。

ところが、地域開発の名の下に、郷土の自然は無秩序に破壊されつゝあります。そのため、沖縄の自然を理解するための貴重な資料が失われつゝあります。いったん絶滅した生物や破壊された自然是、復元できないものでありますから、現状はきわめて憂慮すべき状態といわなければなりません。

事態を重くみたわれわれ郷土の自然を勉強している人たちは、沖縄に「自然史博物館」を建設し、そこに郷土の自然を勉強するに必要な資料を集め必要があると思い、関係者が集まって運動を展開することにしました。

開発が進むにつれて、貴重な生物、鉱物、地質、化石などが絶滅あるいは変貌していきます。いまにしてこのような資料を集めて保存しなければ悔いを千歳に残すことになると思います。

また、沖縄の自然について全国的に関心を寄せる人が多くなるにつれ、本土の研究者の来県も年を追って多くなりつゝありますが、沖縄で手に入れた貴重な資料が県外に持っていくことが多いりました。沖縄の動物や植物、化石など、貴重な研究に使われた標本類なども、本土の大学や研究機関に保管されているので、それをるためにわざわざ本土まで行かなければいけないことが多いのです。研究者の採集品の一組を保管するところがあればどんなにか便利になるだろうと思われます。

学校が週休2日制になったとき、子供たちが2日の休日をどのように過ごすかは、国の将来にかかる大きな問題です。わたくしは2日の休みの1日あるいは半日を、社会教育施設や文化施設などを増設して、そこで受け入れるようにすることが大切だと思います。

自然史博物館は、ただ標本などを陳列しておくだけではその機能を十分果たすことはできません。野外にある素材を、現場において実際に学ぶことができるよう指導していかなければなりません。

民俗博物館、歴史博物館、美術工芸博物館としての県立博物館は、今ここに創立30周年を迎

ました。わたくしたちの祖先のつくりだした有形無形の文化は、わたくしたちの郷土の中でつくられたものであります。文化をつくり出し、これを発展せしめていく場は自然であります。特徴のある優れた文化は、特徴ある自然の中から生れ出るものと思います。

沖縄の自然は、沖縄の古来の文化を保存し、また新しい文化を育て上げる苗代だと思います。背景に立派な自然があって、それが苗代になり肥料になって、文化の花を咲かしてきたのではないでしようか。

もしそうならば、沖縄の他に類例のない自然について、多くの人々に自然を理解させる施設－自然史博物館－をぜひつくってほしいと要望します。県立博物館の創立30周年記念講演会の場をかりて、自然史博物館の建設の必要なことを訴え、1人でも2人でも賛同者が増え、建設が推進できましたら幸せに思います。